

D-14 住宅内における不慮の事故の実態について

大阪市大生活科学 水野弘之

目的 最近20年間の間に、住宅内における転倒・墜落などの不慮の事故の件数が増加しており、住宅は危険化している傾向も存在する。このことは住宅安全計画の必要性を示唆しているが、本研究ではそのための基礎資料の一つを得るために、事故の官方統計の背景にまで遡って、住宅内における事故の実態を明らかにする。

方法 消防署の救急統計および人口動態統計の死亡調査票から、住宅内において発生した不慮の事故の資料を収集し、どのような事故が、住宅内のどのような場所において、どのような状況のもとで発生しているのかを解明する。

結果 1. この20年間に限って言えば、1960年代は住宅内災害が増加したが、1970年代は横ばい状態になっている。このことは、住宅は安全化に向っていないという重大な問題が発生していることを示している。これは住宅のつくり方の是非が問われる重大問題である。

2. 住宅内災害の様相は変化しており、床面での転倒・階段からの転落・溺死が急増している反面で、落下物・火傷・窒息は減少しており、ガス中毒・火災・建物からの墜落は微増にとどまっている。3. 救急事故では、階段からの転落事故が極めて多く、とりわけ飲酒している時の事故が多いことに特徴がある。また、床面での転倒事故は、浴室・廊下・居室で多く発生しているが、居室においては家具で打撲する事例が多いことに注目する必要がある。